

果をよりよく説明していたということです。

それでは、親たちの 3 番目の問いかけに進みます。3 番目の疑問は、母親が子育てをしている場合と長時間保育を受けさせている場合とで、子どもの発達はどう違うのかということです。この問いかけに対し、二つの子どもたちのグループを比較しました。母親がほとんど全面的に世話をしている子どもと、長時間保育を受けている子どものグループです。

母親がほとんど全面的に世話をしている子どもとは保育時間が平均週 10 時間未満、長時間保育を受けている子どもとは保育時間が週 30 時間を超えるものとしました。24 カ月児については、母親による全面的育児は 164 名、保育を受けている者が 184 名。また、36 カ月児では母親による全面的育児は 127 名、長時間保育を受けている者が 147 名でした。なお、家族の特徴については人口統計学的特徴、社会心理学的特徴、人間関係の三つを取り上げました。資料 6 は、家族の特徴を示しています。子どもの発達度合いについては、生後 24 カ月、36 カ月時に評価を行い、認知的・社会的発達の領域を検討しました。また、資料 7 には、生後 24 カ月および 36 カ月時における子どもの特徴を示しました。

私たちは二つのグループについて、家族の

特徴と子どもの発達結果についての相関関係が異なっているかどうかを調べ、その相違が偶然によるものではないことを結論づけようとしてきました。結果は、生後 24 カ月、36 カ月いずれの月齢時においても、家族の特徴と子どもの発達結果のマトリックスに十分な相違は見られませんでした。

III まとめ

これまでの発表を要約させていただきまず、子どもにいつから保育を受けさせるかについてや週何時間くらい受けさせるか、また、保育の種類や質についての決定は家族が行います。これらの決定を導くのはおもに経済的な要因ですが、母親の心理的特徴も影響してきます。

表 6 に本研究の第一段階の研究成果をまとめました。家族の特徴や親による育児は、乳幼児の母親に対する愛着や母子関係、子どもの社会的能力、問題行動、言語的発達および就学レディネスと重要な関連性があります。家族の特徴ならびに親による育児は子どもの発達結果に一貫して関連しますが、保育の特徴は必ずしもすべてとは関連しませんでした。さらに、家族の特徴や親の育児による影響の方が、保育の影響よりも大きくなってい

資料6	
母親が全面的に世話をしている子どもと、長時間保育を受けている子どもへ家族の与える影響を比較するための、家族に関する可変要因	
人口統計学	夫婦関係 所得／生活費
人間性／行動	性格 気分の落ち込み 仕事することの利点 権威的でない
マザーリング ／親子関係	遊びにおけるセンシティブティ 家族への積極的関与 愛着

資料7 子どもの示す特徴	
生後24カ月	精神的発達 (Revised Bayley) 社会的能力 (Adaptive Social Behavior Inventory) 問題行動 (Child Behavior Checklist)
生後36カ月	就学レディネス (Bracken) 言語表現 (Reynell) 聞き取りのための語彙 (Reynell) 社会的能力 (Adaptive Social Behavior Inventory) 問題行動 (Child Behavior Checklist)

ます。最後に、家族の人口統計学的特徴、社会心理学的特徴、人間関係といった特徴において、母親がほとんど全面的に世話をしている子どもと長時間保育を受けている子どもとの間に大きな差異は見られませんでした。

IV 結論

以上の研究結果から、子どもは乳幼児段階においては、母親による全面的な育児を受けているか、保育を受けているかにかかわらず、家族の特徴や母親の行動、母性の属性が子どもの認知的発達ならびに社会感情の発達に重要であることがわかります。また、保育の経験、とくに保育の質は、度合いは小さいものの子どもの発達に一貫して影響をもたらします。さらに、母子間の相互作用が影響することを裏付けるものがいくつかみられます。たとえば、母親に子どもの心を読み取る力が充分に不足、子どもも質の低い保育を受けている場合、愛着の不安定性に関連している可能性が高いといえます。結論としては、(統計上の数字には影響しない)例外的データはありましたが、母子相互作用に関して、母親以外による長時間保育で家族の影響が減少する(変化する)ことはありません。

質疑応答

質問: 米国では父親がよく育児をすると聞きますが、父親による育児を受けた子どもたちに関する情報や統計はありますか？

フリードマン博士: 大変よいご質問で、この点に関する情報を出せたらと思っています。ちょうど『家族心理学ジャーナル』6月号で、子育てにおける父親の関わりや遊びのなかでの父親の子どもに対するセンシティブリティについての論文を発表したばかりですが、父親の関わりもしくはセンシティブリティと子どもの発達の間を研究するにはまだいたっておりません。

質問: 母親のセンシティブリティが子どもの発達に大きく影響するとのことでしたが、母親のセンシティブリティを決定する要因はなんなのでしょうか？

フリードマン博士: ご質問に直接お答えする前に申し上げておきたいのですが、私たちは、母親のセンシティブリティが子どもの発達結果のすべての要因とは見ていません。概念的に理由付けができる場合のみ、母親のセンシティブ

表6

第一段階における研究成果
(家族及び子どもの変数をすべて考慮したうえでの結果)

	愛着	親子関係	保育時に従順でない	問題行動	認知発達と就学レディネス	言語発達
家族	+	+	+	+	+	+
保育の質	!	!		+	+	+
保育の量	!	!		!		
保育の種類			!	!	+	+
保育の安定性*	!		!			

* 安定性とは保育の施設や人を変えないこと + 一貫した影響 ! 何らかの条件下での影響

ティと子どもの発達の間接的な関係のみならず、具体的には、母親のセンシティブリティと乳幼児の母親への愛着、母親のセンシティブリティと子どもの依存心、社会的能力、問題行動の関係を調べたわけですが、これは、母親による認知的刺激の方が、より適切な要因であると考えたからです。

ご質問への直接的なお答えですが、私たちは母親のセンシティブリティを定義づける観察システムを、非常に注意しながら使っていました。発表のなかで、母子間の相互作用を評価する際に見る母親の行動を示す資料をご紹介します(資料4)。また、コールドウェル&ブラッドレーのH.O.M.E.によるセンシティブリティの評価も行いました(資料1)。ただ、現在までのところ、母親のセンシティブリティを決定する要因についての研究は行っておりません。

思うに、子どもの要求に敏感に反応するかどうかを決める母親の意識、ならびに子どもの発達における母親のセンシティブリティが重要だという母親の認識、この二つが、女性と幼い子どもたちとの相互作用におけるセンシティブリティを決定する上で大切な要素だと思います。

質問: 小児科医をしております。私は働く母親たちの子どもが結婚して子どもを持った時、どんな子育てをするのか心配をしています。母親が子どもの時に十分な愛情を受けていなければ、自分に子どもが生まれた時に不安を抱くのではないのでしょうか。こうした世代間の愛情の引き継ぎについての情報はお持ちですか。

フリードマン博士: 母親がフルタイム、あるいはパートで仕事に就いている場合、子どもの

心を十分に読み取ることができない、もしくはセンシティブリティを表現する十分な機会がないのではないかと。そして、母親から十分に心を読み取ってもらえなかった子が大きくなって子どもを産んだ時、幼児の心を読み取るという知識がないまま親になってしまうのではないかと心配されているのです。

私たちの研究では、対象児童のほとんどが保育を受けていました。母親は子どもとのふれあいの時々において、センシティブリティを示しています。本日お話ししたように、母親のセンシティブリティと子どもの発達には関係があることがわかりました。母親のセンシティブリティが高いほど、子どもの愛着安定性が高まります。センシティブリティが強いほど、子どもの社会的能力は高まり、問題行動を示す可能性が低くなるのです。ですから、保育を受けている子どもたちの母親も、子どもたちにセンシティブリティを示すことはできるわけです。

しかし、これらの母親が毎日、どの程度の時間、子どもたちの心を読み取ろうとして関わりをもっているのかはわかりません。また、センシティブリティを次の世代に引き継ぐのに、どの程度のセンシティブリティによる相互作用が必要なのかわからないのです。ご説明するだけのデータはありませんが、母親が働いており、子どもに保育を受けさせていても、母親が子どもの心を読み取ろうと行動する機会は十分にあります。そして、世代を超えてセンシティブリティを引き継ぐのに十分な母子間の相互作用があるとも考えています。

乳幼児保育に関する NICHD の研究

訳：小林 登(CRN 所長、国際小児科学会会長、東京大学名誉教授)



訳
に
あ
た
っ
て

私の旧友である NICHD(米国・国立小児保健・人間発達研究所)の Center for Research for Mother and Children の Director, Dr. Sumner Yaffe にいただいた資料のなかに NICHD が一般向けに公表した Robin Peth-Pierce による“ The NICHD Study of Early Child Care ”(乳幼児保育に関する NICHD の研究)というパンフレットがあり、有益な資料と考えたので NICHD の許可を得て、ここに全訳を發表することにした。21 世紀は、母親単独による子育ては少なくなり、母親・父親、そして保育者がチームを組んで行う子育てが中心となろう。以下、ここに全文を紹介し、そのような問題を考える参考としていただくとともに、それぞれの立場からよりよい子育てのあり方を確立する運動をしようではないか。

なお、翻訳にあたっては、以下のことに留意した。まず、わが国では、「保育」は施設などにおける集団的な子育てをさし、家庭での親なりによる「育児」とは区別されている。英語ではそれがなく“ child care ”一つである。その点、翻訳にあたっての区別が困難であった。また、“ interaction ”は相互作用と訳したが、母子間の行動のやりとりであって、平たい言葉で言えば「ふれあい」である。“ sensitive ”は、子どもの心を読み取る感受性の強いことを意味すると考えられるが、平たく言えば「細やかな心」「優しい心」「デリケートな心」であろう。“ early child care ”をどう訳すか考えたが、一応「乳幼児保育」とした。また、“ in-home care giver ”は子どもの家庭を訪問し子育てする者によると考え「在宅保育」、 “ child care home provider ”は自分の家に子どもを預かり子育てする者によると考え「家庭保育」、 “ center-based care ”は制度的に認められた施設での子育てと考え「保育園による保育」とした。なお、文中内容の重複する部分は削除した。

全文翻訳

米国における保育

保育は米国の多くの家庭にとって、まさに人生の現実になりつつある。妊娠後、労働力に参入あるいは留まったりする女性の数が増え(註:子どもが生まれるため収入を増やす必要上か)、また一人親も増えるにつれて、乳幼児や子どもの保育を母親以外に任せる家族が増えつつある。1975年には、6才未満の子どもを持つ母親の39%が家庭の外で働いていたが、現在、その割合は62%である(労働統計局)。こうした母親のほとんどが、出産後3~5ヵ月で仕事に復帰するため、子どもたちは乳幼児期のほとんどをさまざまな保育状況で過ごすことになる。

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」について

「乳幼児保育に関するNICHDの研究」は、保育における多様性が子どもの発育にどのように関係するか調べる、今日、最も包括的な保育についての研究である。1991年、国立小児保健・人間発達研究所(NICHD)の支援を受けた研究者チームは、1364人の子どもに研究に参加してもらい、その後7年間にわたり、ほとんどの子どもについて追跡調査を行った。過去2年間、生後3年間の保育と子どもの発育との関係について研究結果を発表してきたが、今後も全米10カ所にある保育研究拠点から集めた情報の分析を続ける予定である。

乳幼児保育に関するNICHDの研究は、どのような問いに答えるのか

この研究は、保育は子どもにとってよいことか、あるいは悪いことかという普遍的な問いかけを超えて、保育のあり方の違いについての側面 たとえば質と量 が、子どもの発達のさまざまな側面にいかに関係するかに焦点を当てることで、われわれが子どもの発達と保育との関係を理解するのを助けることが目的である。より具体的に言うと、認知・言語発達、母子関係、自制、素直さ、問題行動、同年代の子どもたちとの関係、身体的な健康と、保育との関係を評価している。

研究に参加した子どもと家族: どんな人たちが

1991年に始まった研究には、米国中からさまざまな経済的・人種的背景の子どもたち合計1364人とその家族が参加した。対象家族は全米10カ所で採用され、その社会経済的背景、人種、家族構成もいろいろであった。76%の家族が非ヒスパニック系白人、13%近くが黒人、6%がヒスパニック系、1%がアジア系/太平洋諸島系/アメリカ・インディアンで、4%がその他の少数民族である。これは米国全体の人々の人種構成を反映している。こうした多様性によって、異なる民族出身の子どもたちが、保育の異なる特徴に、違う形で影響を受ける可能性が調査できる。

人種の多様性を反映させただけでなく、い

ろいろな学歴の母親とそのパートナーを参加者に含めた。母親の約 10 %の学歴は 12 年生未満で、20 %強が高校を卒業している。3 分の 1 がなんらかのカレッジを卒業しており、20 %が学士号を取得、15 %が大学院あるいは専門的な学位の保持者である(米国人人口全体では、それぞれ 24 %、30 %、27 %、12 %、6 %である)。

社会経済的な地位については、研究に参加した家族の平均所得は 3 万 7781 ドル(約 400 万円)であった(米国家庭の平均所得は 3 万 6875 ドル)。そして、研究参加者のおよそ 20 %が国の生活補助を受けている。

この研究に参加した子どもたちは、どのような種類の保育を利用したか

この研究では、研究者ではなく親が、子どもが受ける保育の種類と時期を決定した。事実、家族は、保育を利用するかどうかの計画に関係なくこの研究に参加した。子どもたちは、いろいろな育児・保育環境におかれた。父親、他の親戚、在宅保育者、家庭保育者、保育園による保育などである。保育の状況は、正式な訓練を受けた保育者が一人の子どもを預かるものから、何人かの子どもを預かる保育所のプログラムまで、さまざまであった。乳児の半数近くが最初に受けた育児・保育は、親戚によるものだった。しかし、生後 1 年、またその後にかけて、保育所と家庭でのデイケアの利用への移行が見られた。

本研究では、保育の種類を管理したり選択したりせず、同時に保育の質も管理したり選択したりしようとはしなかった。保育の質は数種類の方法で測定され、非常にばらつきがあ

った。しかし、全国規模で保育の質を測定した研究はないので、本研究における育児・保育が、全国的な子育てのあり方の代表としてどれだけ適切か判断する方法はなかった。

育児・保育・家族、子どもに関するどのような情報を考慮したのか

研究チームは子どもとその環境にかかわる数多くの特徴について、さまざまな種類の情報を集め、研究した。子ども対大人の比率やグループの大きさなどの保育の特徴とともに、保育の質や保育を受ける時間、保育開始年齢、ある子どもが同時に、また長期間に経験した異なる保育環境の数など、子ども一人ひとりの保育経験を評価した。家族の経済状況や家族構成(一人親またはパートナーのいる親)、母親の語彙(知性に代るもの)など、家族の特徴も評価した。その他家族に関しては、母親の学歴、心理的な適応性(アンケートによる測定)、育児姿勢、母子間の相互作用の質、そして子どもの最適な発育のために家庭環境がどの程度貢献しているかなどの項目を分析に含めた。性別や性格など、子ども一人ひとりのさまざまな特徴も考慮した。

この研究では、家族や子どもの性格による影響に加え、育児・保育の特徴と経験がどのように子どもの発達に独特な貢献をしているか明らかにしようとしている。これまでの研究で、一般的に家族内で子どもが受ける育児の質は、保育における質と非常に似通っていることが立証されている。そこで、当研究チームは、保育が子どもの発達に貢献しているこの他の点について重点的に調べることにした。

データは子どもの発育についてのさまざま

な研究問題に答えるべく、いろいろと異なった方法で分析されたため、必ずしもすべての項目が分析に含まれるわけではない。以下に報告する研究結果の要約には、関連項目のリストが記されている。

乳幼児保育に関する NICHD の研究:
私たちは何を学んだか

多様な情報源(親、保育者、訓練を受けた観察者、試験者)を使い、生後7年間にわたり、家族環境、育児・保育環境、子どもの発達、身体的な成長と健康状況に関する細かい情報を集めた。

参考文献(CRN ホームページ参照)に記載されるように、今日までに本研究に関する論文はいくつかの科学関係の学術誌に発表されている。また、他の研究結果については、学会で発表されたり、出版準備が進められている。「NICHD 乳幼児保育研究」チームが共同執筆した論文では、研究問題が幅広く取り上げられている。

研究結果は、おもな4分野に分類できる。最初の記述的な成果では、NICHDの研究に参加した子どもたちが受けた保育のイメージを描写している。これには、大人対子どもの比率、生後1年間に受けた保育の形、貧しい子どもの保育などの「管理可能」な特徴についての調査が含まれる。他の分野は、保育を受ける子どもにとっての家族の役割、子どもの発達と保育との関係、母子関係と保育との関係だ。こうした分野のなかで、より裕福な家庭と低所得家庭の子ども、また、非ヒスパニック系白人と少数民族の子どもにとって、保育経験がどの程度彼らの発達に関連しているか

を比較し、その結果が示されている。さらに、子どもの行動あるいは母子間の相互作用の度合いを予測するものとして、現在と過去との保育経験の比較もなされている。

NICHD の研究における保育の詳細な報告

1. 生後1年間の保育経験歴

子どもが保育を受けた時間の長さは、いろいろであった。平均的な保育時間は週に33時間であったが、これも子どもとその家族の民族性によって異なる。非ヒスパニック系白人は保育時間が最も短く、非ヒスパニック系黒人は最も長かった。ヒスパニック系白人とその他の民族は、その中間に位置している。

一般的に、ほとんどの乳児が生後1年間に2種類以上の育児・保育環境を経験していた。乳児の半数近くは父親/パートナー、あるいは祖父母による育児が最初の育児経験で、20%強が家庭保育、保育園に預けられたのはわずか8%だった。ほとんどの乳児は4カ月になる前に保育を経験している。

全体的にみて、研究結果は乳児保育への高い依存度ときわめて早い時期の保育の開始を示している。ほとんどの乳児は生後1年間を保育所ではなく、公的ではない保育環境で過ごしている。

2. 貧困は保育経験と関連性があるか

本研究に参加した家族・子どもの35%近くが、貧困状態あるいはそれに近い状態で生活している。貧困は、家庭の経済状況を測る標準的な方法である所得対必要生活費率によって定義された(米国商務省)。これは、連

邦政府からの補助金を除いた家計所得を、その世帯に当てはまる貧困水準所得で割って計算する(1991年現在の4人家族の貧困水準所得は、1万3924ドル)。本研究に参加した家族のうち、所得対必要生活費率が1.0を下回る家族は16.7%、1.0～1.99の家族は18.4%であった。

研究チームは、生後1年間の貧困が、保育開始年齢や保育の種類、質・量と関連性があるか質問した。貧困が利用する保育の特徴を決定する要因になるかを判断するため、貧困家庭およびその子どもたちを(所得対必要生活費率1.0未満)、貧困に近い家庭と子どもたち(所得対必要生活費率1.0～1.99)あるいは、より裕福な家庭と比較した。

保育開始年齢については、貧困状態に陥り、抜け出した家庭(一時的貧困といわれる)が、生後3カ月前という非常に早い時期に保育を始める傾向が最も高かった。そこで研究チームは、この保育の早期開始は、家族を貧困から抜け出させるために、母親が長時間の雇用にく必要があるためではないかと仮説を立てた。一貫して貧しく、国からの援助を15カ月以上受けていた家庭では、早期保育や、生後15カ月の時点でなんらかの保育を受ける可能性はより低かった。

貧困家庭は、他の家庭に比べて、どのような保育であれ利用する可能性が低い。利用している場合は、他の所得グループの家庭と同じぐらいの時間を保育にあてていた。15カ月時点で保育未経験の子ども之母親は教育レベルが最も低く、大家族の出身であった。こうした大家族も、継続的に貧困状態におかれる傾向にある。

一般的に、家庭環境で(家庭保育者あるい

は家族によって)保育を受けた貧困家庭の子どもたちは、比較的、質の低い保育を受けていた。一方、貧困家庭の子どもで保育園に預けられた場合、裕福な子どもが受ける保育園での保育と匹敵する、より質の高い保育を受けていた。貧困に近い家庭の子どもたち(所得対必要生活費率1.0～1.99)は、貧困家庭の子どもたちよりも質の低い施設での保育を受けていた。これは、おそらく、貧困に近い家庭の子どもたちは、貧困家庭の子どもたちが受ける資格のある補助金付きの保育を受ける資格がないからであろう。

まとめると、貧困家庭また貧困に近い家庭の乳児は、比較的質の低い保育を受ける可能性が高い。これは、生後1年間、ほとんどの乳児が保育園に預けられないのが一因である。

3. 質の高い保育を構成する保育の特徴

研究チームは積極的な保育、つまり質の高い保育に寄与する特徴とは何かを見極めるために、さまざまな保育環境を研究した。積極的な保育は、相互作用の頻度を観察・記録し、その質を格付けすることで測定される。また、保育環境も、グループの大きさ、大人対子どもの比率、物理的な環境などの「管理可能な」特徴あるいは政府のすすめるガイドラインの観点、さらには正式な教育や専門訓練、保育経験、育児に対する信念など、保育者の特徴という観点から測定された。

調査の結果、次のことがわかった。すなわち、他と比べて安全で清潔であり、刺激的な生活環境を有し、小規模グループで、大人1人に対する子どもの比率が低く、子どもに感情を表現させ、その意見を取り入れる保育者

のいる割合の高い保育環境においては、より子どもの心を読み取る力が強く、敏感で、知的な刺激を与える保育者がいた。つまり、よりよい子どもの発達に結びつくであろう保育の質である。

4. 人口統計学的特徴と家族の特徴:利用される保育の種類と関連性があるか

本研究の目的の一つは、人口統計学上の変数そして家族についての変数が、各家庭の利用する保育の種類にどの程度関係するか調べることであった。研究チームは、人口統計学的特徴(民族、母親の学歴、家族構成)、経済的特徴(母親や家族の所得)、家族の質の特徴(母親の姿勢と信念、家庭環境の質)などの3組の変数を検証し、保育開始年齢、保育の種類、質・量との関係を調べた。

家計は、おもに保育の量、開始年齢、種類、質に影響を及ぼしている。母親の所得への依存度が高い家庭では、依存度が低い家庭に比べて早期に保育を開始し、保育にかかる時間も長かった。母親が被雇用者で最高所得額を得ている場合、生後3~5カ月で乳児保育を開始する可能性が高く、生後15カ月間に在宅保育を利用する可能性が最も高かった。最低所得層と最高所得層の家庭の子どもは、中間所得層の子どもよりも質の高い保育を受けていた。

経済的な要素(母親および家族の所得)とは別に、母親の就業が子どもの成長により影響を与えると信じる母親は、乳児の時に保育を開始し、多く利用する選択をしていた。一方、就業が子どもにリスクを与えると思う母親は、形式によらない、家族中心のあるいは在宅での保育を選ぶ傾向にあった。就業が子ど

もに与えるリスクは低いと考える母親は、保育所あるいは家庭での正式な保育を利用する可能性が高かった。

5. 長時間保育を受けている子どもと、母親がほとんど全面的に世話をしている子どもへの家族の影響

本研究のもう一つの目的は、母親がほとんど全面的に世話をしている子ども(保育時間が週10時間未満)と長時間保育を受けている子ども(保育時間が週30時間超)の保育における家族の影響を比較することである。

家計や母親の学歴などの家族の特徴は、子どもの発育を予測するうえで効果的な指標となる。これは、母親の世話をほとんど全面的に受けている子どもの場合も長時間保育を受けている子どもの場合も同様である。ここでの結果は、子どもの発育への家族の影響は、両親以外が長時間保育しても大きく減ったり変わったりすることがないことを示した。

6. 保育と母子の愛着の関係

研究チームは保育の量、保育開始年齢、保育の種類など保育についての変数をいくつか検証し、こうした要素が乳幼児の母親への愛着にどれだけ関係するか調べた。愛着とは、母親への信頼感のことである。

研究チームは、生後15カ月の時点では、保育自体が乳幼児の母親への愛着の安定性に悪影響を与えることもなければ促進することもないことを発見した。愛着は、30分間に母親と子どもを離れさせてから、また一緒にするという標準的なやり方で測定した。

確かに、ある特定の保育条件と特定の家庭環境との組み合わせは、乳幼児の母親へ